退職記念講義記録

ウェルズ恵子先生最終講義　冒頭の挨拶

岡　本　広　毅

本日はウェルズ恵子先生の最終講義にお集まりいただきありがとうございます。進行役を務めます国際コミュニケーション学域・英語圏文化専攻の岡本広毅です。よろしくお願いいたします。

さて、はじめにウェルズ恵子先生についてご紹介させていただきます。先生は1992年に立命館大学に着任されて以来30年間お勤めになりました。この間、新学域の立ち上げや拡張にもご尽力されました。先生のゼミはいつも人気で活気に満ちていました。楽器演奏やハロウィン・パーティなど楽しい授業風景がすぐに浮かびます。今日も多くの卒業生が会場に集まっています。

先生のご専門は音楽文化、アフリカン・アメリカン文化、アメリカ文学・文化、比較芸能文化など多岐に渡ります。出発点はアメリカの詩だったと伺っていますが、そこから音楽文化や歌詞の比較研究など領域を広げられ関連書籍を数多く出版されています。「歌」は声で送り出される「詩」であり、人はどんなときも音楽や物語とともに歩んできたと述べられます。先生は「歌」や「詩」、そして「文学」という「ことばの芸術」がもつ力、苦境にある人々を救うその力に光を当ててこられました。近年は、権威に保護されていないもの、すなわち、日常生活とともに変容し生き続ける表現を「ヴァナキュラー文化」として捉え直し、学際的な研究方法を打ち出されています。このように、先生の眼差しは常に権威の向こう側にある多様な声に向けられていました。ご著書の中に次のような印象的な一節があります。

> 19世紀のアメリカ。日本と同じに、産業が高度に機械化される以前のアメリカは歌声に満ちていた。身体を使って働く人たちが、いつも歌をうたった。仕事にも休息にも歌が必要だった。時計が音をたてて時を刻むように、恋人たちの足音が先を急ぐ人々の靴音とは異なるように、雨の日の溜息が空の涙にまぎれるように、日々の生活とアメリカの風景と巷の歌声とは、混じり合って存在していた。まだ歌が、ステージの上や電波の向こうに「スター」というお手本を持たなかった頃、歌はみんなのものだったし、働いてばかりいる人々には欠かせない相棒だったのだ。
>
> （『アメリカを歌で知る』祥伝社新書，2016，7頁）

日常に埋もれていた何気ない音や声が先生の研究人生を彩ってきたのではないでしょうか。それは、現在のアメリカ文化の基礎を作った奴隷制下の人びとや移民、その子孫の声であり、彼らがヨーロッパ諸国やアフリカから生活の中に持ち込んだ歌、あるいは先住民、日系人らが語り継いだ物語だったのです。本日は最終講義となりますが、先生の声を存分に楽しみたいと思います。それではウェルズ先生よろしくお願いいたします。